

2023、8、23

直方ミニバスケットボールクラブだより

共育コラム

自分の弱さを自覚し、自分に勝て



小学生は、0歳から10歳前後の年齢までに、信頼できるおとなとのかかわりによって育まれる愛着形成を土台に、日々の生活のなかにある小さな生活体験、多様な体験の積み重ねによって、多くのことを学び、鍛えられ、年齢が上がるにつれて強く、たくましく、やさしく成長していきます。

しかし、いま社会（学校、地域、家庭等）は、長引いたコロナ禍の影響もあり、その日常体験で、「強さ」「たくましさ」「やさしさ」を鍛えられる機会は、減少しています。（誤解のないように）「鍛える」というのは、どなられ、たたかれ、ということではありません。むしろ逆で、生活上のさまざまな場面において、主体性を育むということです。自分のことを自分で考え自分で判断し決めていくこと、出てくる結果にも自分で責任をもつこと、望む結果を出すことができなかつたとしても他者のせい（責任）にせず自分でしっかり受けとめ、もう一度自分で立ち上がり再チャレンジしていくこと、そんな強くたくましい子どもに育てていくことです。

以前にもお伝えしたことがあると思いますが、どちらかという、「転ばぬ先の杖」的なかかわりが多い世の中です。きついこと、つらいこと、失敗経験などは、さけられる風潮にあります。おとなが、草刈りをし、石ころを取り除き、先に先に手を尽くし、おぜん立てをしたところを歩かせる、そんなかかわりが多くなっています。子どものすることを、おとなの目線からは、「これはうまくいかないぞ」「失敗するぞ」と、容易に想像できることもあります。それゆえ先に先に道を切り拓いてやったり、整備してやったり、こけたらすぐに手を差し伸べてやったり、というかかわり方をしがちです。

しかし、それでは、自分で考え、自分で選び、自分で決めたということ、うまくいかなかった、失敗した、ころんで痛かった、などという思いを味わうことができません。子ども時代に体験しておきたい貴重な経験を積むことができません。

失敗したことの無い子ども、転んだことの無い子ども、痛い思いをしたことが無い子ども、転んだ後に立ち上がる経験をしていない子どもは、いざそのときがきたときにどうしていいかわからず、座り込んだまま泣きつくすしかなくなります。そのつらさは年齢が上がれば上がるほど大きく深刻なものになりがちです。幼少期のときに、「くやしい」「なにくそー」「もう一回」「次こそはー」「助けてー」「力をかしてください」「お願いします」など、そのときどきに、自分にできる次の一歩を踏み出す何らかの行動を起こすことができる力をもっておくことが必要です。

試合に負けても、思うような結果が出なかつたとしても、そのことが次に活かされていくことになれば、意味ある結果だったと言えるものになります。そうしていかなければなりません。まさに

“自分に勝て” の実践です。